

シリーズ

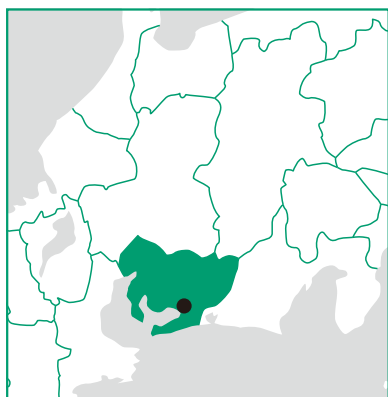
新・農業人

鈴木智恵さん

ザンブラノ・ルマイナ・ビクトルさん

南米ペルーから日本に来て10年
やればやるだけ成果が得られる農業を生業に
今では地域農業の中核を担う夫婦

所在地 ● 愛知県豊川市
 就農年 ● 2012年
 経営規模 ● 野菜 (キャベツ12%、ミニトマト55%、ナス2%)
 従業員 ● 11人 (うちインドネシアからの外国人研修生7人)



智恵さんが管理を担当するトマトハウスにて

いざ、見知らぬ土地へ

愛知県豊川市。この地に就農して10年、いまでは地域農業の中核を担う夫婦がいる。ザンブラノ・ルマイナ・ビクトルさん(50歳)と鈴木智恵さん(42歳)。二人とも農家出身ではなく、ゼロからこの経営を築き上げた。

ビクトルさんは日本で農業をすゝるにあたり最も難しかったことについて、このように語る。

「日本では、実績や経験を重んじる。一方、生まれ故郷のペルーでは、やったことのないことでも、まずは飛び込んでみる。そこから試行錯誤して、やりながら覚える。失敗はあくまでも自己責任。だけど、一度決めたことは必ず最後までやる。その文化の違いを理解してもらうのが大変だった」

ビクトルさんは南米・ペルーで生まれ、古代遺跡マチュピチュの近くで育った。実家は運送業を営み、不自由な生活を送っていた。

しかし、ビクトルさんには葛藤があった。「お坊ちゃん」扱いをされ、一人前として見てもらえなかったのだ。自分一人で、どこまでできるか試してみたかったところ、折しもアルベルト・フジモリ氏が1990

年にペルー大統領へ就任。日本の入管法が改正され、ペルーから日本への出稼ぎが本格化した。「日本で勝負だ」。94年、3年間でむしやりに稼ぐ覚悟で来日した。

来日してからは工場などで働き、豊橋市出身の智恵さんと出会った。2006年に結婚し、ビクトルさんは日本永住を決心。いったん仕事を辞めて日本語学校に通い、語学を必死で学んだ。

学校卒業を控えた就職相談ですすめられた農業に、強く心を奪われた。人に雇われる立場ではなく、自分が雇い主になれる職業を探していたといい、「農業なら、やればやるだけその対価を得られる。家族との時間をつくることもできる」と就農を決意。最初は面食らった智恵さんも、覚悟を決め前へ進んでいくビクトルさんの熱意に押され、一緒に日本で農業に取り組むことを決断した。

「文化の違い」がこつ障壁

ところが、さっそく最初の壁が立ちほだかる。就農相談をしいについた先々で「農業は甘くない」「本当にやれるのか」と懐疑的な目で見られ、まともに取り合ってもらえない。それでも、腹を決めたビ



現在も「ジャングル」を整地し規模拡大を続ける

クトルさんは前だけを向いていた。県の農業改良普及センターに通ううち、親身に相談に乗ってくれる普及指導員と出会った。そこでキャベツ農家を紹介してもらい、研修しながら就農準備を進めた。

研修期間はもとも2年の予定だったが、基本がわかると、一日でも早く自分の経営にチャレンジしたいと思うようになった。周囲を説得し、2012年秋、研修6カ月で独立。妻の知人が農地を貸してくれた豊川市へ移り住んだ。

そして選んだ最初の栽培品目は、なんと未経験のナス。普及員に相談し選んだ品目だが、ペルーでは標高3600m以上の高山地帯に住んでいたため、ナスは育てたことがな

いどころか、見たことも食べたこともなかったという。ナス農家仲間のやり方を見よう見まねで、まずは5ヶ月から栽培を始めた。

就農2年目、さらに経営を拡大しようとしたが、大きな問題が待ち受けていた。誰も農地を貸してくれず、「よそのものだから」という理由で取り合ってもらえなかった。

それなら自分の行動で信頼を得るしかないと思いきや、駆けずり回り、ようやく借りられた農地はビクトルさんいわく「ジャングル(耕作放棄地)」だったが、中古の農機を買い、自前で整地。そんな二人の姿から並々ならぬ覚悟が伝わったのだろう、少しずつ農地が集まるようになり、所属するJAの正組合員資格も取得することができた。

ミニトマトの生産も開始

2015年、経営規模は40坪まで増え、優秀なスタッフも確保できた。そこで周年雇用を可能にするため、ミニトマトの栽培を導入する。こちらも未経験品目だったが、これまで幾度となく「ジャングル」を切り拓いてきた二人にやらないという選択はなかった。智恵さんは子育てをしながら6カ月間農業大学校に通い、生産技術を

習得。現在に至るまで技術向上の努力を続けている。

現在主力のキャベツも、最初はナメクジが大量発生して夜通し駆除したこともあったが、徐々に栽培方法を確立。今では12畝の規模まで拡大を果たした。

外国人研修生への信頼

現在はインドネシアから来た7人の外国人研修生が働いている。受け入れはじめて5年以上経つが、ビクトルさんにとって、外国人研修生は同志のようなものだという。「とにかくがむしゃらに仕事をしたいという、揺らぐことのない軸がある。多くのハングリー精神も彼らと同じ。目を見ればその覚悟がわかる。志を共有しているから、信頼関係も築ける」。外国人研修生にもまっすぐに向き合うビクトルさんの姿勢がうかがえる。

そんな二人にも、新型コロナウイルスの影響は容赦なくのしかかった。トマトの販売単価は暴落し、外国人研修生も来日がストップ。加えて、ナスは施肥がうまくいかず、病気で大きな損失を被った。そこで、今までは一部の畑のみに掛けていた収入保険をすべての耕作地に適用。キャベツも3畝分は年2



信頼を寄せる外国人研修生

回転させ、単位当たり収量を高める作戦を取る。二人の試行錯誤はまだまだ続く。

ビクトルさんの今後の目標は、「加工や販売より、とにかく生産に注力したい。もう少し規模拡大すれば、売上高1億円に手が届く。1億円を達成したら、次は2億円をめざしたい」。智恵さんは「私は、単位当たり収量を上げて収益力を高めたいです」。石橋を「作りながら渡っていく」ビクトルさんと、「叩いて補強する」智恵さんの、絶妙な連携体制が垣間見えた。これから、二人は力を合わせて、まだ見ぬ未来の開墾を続けていく。

(編集部 大谷 香織 / 文
河野 千年 / 撮影)

